

都市公園法制定50周年記念フォーラム 地域の活性化と都市公園

北海道開発局 事業振興部都市住宅課

北海道開発局主催、北海道・札幌市後援による『都市公園法制定50周年記念フォーラム～地域の活性化と都市公園～』が平成18年9月13日、札幌市のかでる2・7で開催されました。このフォーラムは、都市公園法制定50周年を記念して、地域を活性化させるツールとして都市公園の既存ストックを有効に活用してもらおうと開催されたものです。当日は、行政関係者や都市公園の管理受託者、市民活動関係者や学生など約200名の方々の参加がありました。

基調講演では、北海道大学名誉教授の浅川昭一郎先生が「都市公園の活用と地域への展開」と題して、地域住民の方々は地域でそれぞれ考えて地域の中に公園をしっかりと位置づけることが重要であり、公園行政に携わる方は長期的なビジョンを持つことが必要と提案、パネルディスカッションでは、都市公園の観光的な利用と地域コミュニティの核としての利用について活発な意見交換が行われました。

基調講演

都市公園の活性化と地域への展開

浅川昭一郎氏 北海道大学名誉教授

都市公園の始まりは明治6年の太政官布達によるといわれ、江戸時代まで行楽地として多くの人たちが集った社寺境内等を公園にすることから始まりました。

北海道では、札幌の偕楽園という公園が明治になってからできました。これはサケ・マスふ化場や農業試験場など、いわゆる産業振興の場と一体となってできた公園です。また、函館公園は、地域の人たちでつくられた公園、今でいう「市民参加」の公園です。その他、札幌の大通公園をはじめ、北海道ならではの個性的な公園が造られてきました。



浅川昭一郎氏
北海道大学名誉教授

昭和31年に制定された都市公園法は、それまでにつくられた公園をきちっと守っていくこと、都市化が急速に進む中で、計画的に公園を整備していくことを目的につくられた法律で

す。特に、都市化が進む中で失われる緑の代替地、あるいは遊び場をなくした子供たちの遊ぶ場所、地域のレクリエーション活動の場として非常に重要な役割を担ってきました。しかし、現在は人口減少や少子高齢化の中で、公園の役割や需要も大きく変わらざるを得ないという状況にあり、もう一度都市公園の機能・役割を考え直し、今後どうあるべきかを考える時期にきていると認識しています。

公園・緑地の機能は、レクリエーション、教育、景観、防災、環境保全などに分けられますが、現在、何が重要になっているか、将来に向けてどういうことが大切かといえ、何といっても、地球環境問題から始まって、地域の持続可能なランドスケープにどう貢献できるかということが大きな課題になっています。この「持続可能な」というのは、必ずしも自然生態ということだけではなく、その地域の社会や文化や経済的な持続可能性を含めたものでなければならないと思います。その一部として、「グリーンインフラ」という言葉が使われるようになってきました。これには土や緑を含めてですが、これが生活、健康を支え、その

質を豊かにするために重要だということです。グリーンインフラに対して、従来のインフラは「グレーインフラ」といわれています。その中でも特に北海道で私が大事だと思うのは、雨水とか雪の処理としてスペースを使うことではないかと思えます。北海道の冬を考えれば、雪の堆雪場になるようなスペースをもっととってよいと思います。

旭山動物園の小菅園長さんは、「まず、動物園がなぜ必要かということ考えた。人間だけでは生きられないのだ。——ここに原点がある」ということをおっしゃっているのです。公園に関して何が大事かという、基本的には生活を豊かにするという事ですから、そこが原点になる。その中から心身の健康や交流などが出てくるわけで、やはり原点に戻る。そして交流とは何かを、まず自分たちではっきりさせていかなければならないと感じています。

それから、公園は孤立したものではなくて、あくまでもその地域の中での位置づけです。具体的には、緑やレクリエーションのシステムの中で特定の公園がどう位置づけられるのかということを中心にきちんとして見つけ出していく。そして、経済効果なども評価していくのがいいのではないかと思います。良好な維持管理が魅力を高める要素でもあります。さらに、公園行政は長期的なビジョンを持って、どうあるべきかということを出していかないといけない。目先のことにあまりにとらわれ過ぎますと、本来の持っている公園のあり方というのを見失ってしまうおそれがあると思います。

アメリカにおける公園の再生や創出についての成功例では、公共主体で行われて成功した例、公共・民間協働で成功した例、それから、駐車場の上を公園にするようなマーケット的な手法で成功した例などがあります。日本は日本のいろんな条件がありますので、そういう中で何が可能なのか、その地域で何が求められるのかを考えるべきだと思います。



パネルディスカッション

都市公園を考える！～観光資源として・地域コミュニティの核として～

テーマ1 都市公園の観光的な利用

鈴木 この夏にJTBは二つのトライアルを行いました。一つは「スカイバスさっぽろ」。もう一つは「ポロトコタンの夜」です。「スカイバスさっぽろ」は、屋根のないバスで札幌市内を巡る1周40分のコースです。中島公園では園内のキタラや豊平館を案内するこ



鈴木紀彦氏
(株)JTB北海道市場開発室観光戦略プロデューサー

とで、次はじっくり見てみたいという方の動機づけになり、その後足を運ぶという方もいました。都市観光は、公園利用の相乗効果、波及効果を非常に期待できると思います。観光客に大事なのは、観光地の満足度向上。期待に対して住民なり公園事業者が応えなければいけない。公園に交流のステージができれば、当然、行政サービスの向上にもつながっていきます。

もう一つの事例は、「ポロトコタンの夜」です。アイヌ民族博物館（白老町）は、アイヌ民族の伝統的な民具や踊りなどを常時公開している施設です。そこで提案したのが、時間軸をうまく使えないかということです。例えば、夜や朝という時間、その辺をフレキシブルにできる仕掛けがこれから必要なのではないかとということで、今回は夜に焦点を当てたプログラムを行いました。夜、博物館を開放し、昼間やらないプログラムを特別に観光客の皆さんに見ていただく。演出としてはかがり火やたいまつでお迎えする。そういった演出は、財団職員の方々が自ら考え出したものです。

従来のプッシュ型の集客では、もう観光地は限界にきています。これから目指すべきは、アイヌ語の「イランカラプテ」という言葉です。「こんにちは」という意味と、「あなたの心にそっと触れさせてください」という非常にきれいな意味が込められています。「ちょっとあなたの心に触れる」ようなプロモーションの仕方が、これから有効ではないかと思っています。

下平尾 滝野公園はスタートしてから20年余り経ちましたが、一層の利用者増を図るためには、道外及び国外からの観光客を誘致することも一つの

方策です。このことは観光レクリエーションの活性化により地域経済の活性化に貢献するという滝野公園の基本方針にも合致します。

「近くて遠きは兄弟とか親族の間。そして、遠くて近きは男女の仲」といいますが、「近くて遠きは公園と観光の仲」です。都市公園は日常的な利用を前提としていて、非日常的な体験をその本質とする観光とは、目的や性格が異なるものです。本来的には相入れないものといってもよいと思います。このような本質的な違いや、市民の税金で整備・管理されているという都市公園の性格から、一般的な都市公園ではこれまで、域外の人を対象とする観光に関心が薄かったものと思われま

す。滝野公園が観光利用に取り組むようになった

理由は二つあります。一つは、一層の利用者増と観光レクリエーションの活性化により地域経済に貢献するという外向きの事情。もう一つは、公園中心ゾーンに花をテーマとするカンントリーガーデンと、雪を素材として、歩くスキー、ゲレンデスキー、そり滑りなど



下平尾 部氏
財団法人公園緑地管理財団滝野管理センター長

を展開する滝野スノーワールドが整備されたという内的条件が整ったことです。

幾つかの観光客誘致イベントを試行的に実施し、われわれなりに一つの結論を導き出しました。それは、雄大な自然を背景としたカンントリーガーデンの花と、雪国の日常的な暮らしの一部である雪を素材とした遊びが、道外とか国外の観光客に対して非日常的な体験を提供する観光資源になり得るということです。旭山動物園の例もあります。何が大きくなるかわからない時代です。公園と観光が近くて遠き関係からWin-Win（双方にメリット）の関係になるかどうか、試してみる価値は十分あるのではないかと考えています。

宮武 現在、北海道にある48カ所のオートキャンプ場のうち、14カ所が都市公園事業で整備されたものです。都市公園で整備されたオートキャンプ場と他のキャンプ場との大きな違いは、一つは規模です。都市公園では、広域公園をはじめとして比較的規模の大きな公園の中につくりますので、単にキャンプだけではなく、周りでいろんなレクリエーションができる。つまり、利用者のニー



宮武 清志氏
社団法人北海道オートリゾートネットワーク協会事務局長

ズに対応して、いろんなサービスや施設をまとまった形で提供できるのが、都市公園事業で整備したオートキャンプ場の一番の特徴だと思います。

先週土曜日に「ビジット・ジャパン」キャンペーンの一環で、台湾の学校関係者が12人、北海道に来ました。

その参加者が「われわれは非常にラッキーだ」という話をするのです。「どうしてですか」と聞くと、一応行きたい地域の希望を出せるそうですが、全国9地域百十数人のうち北海道を選んだのが59人、6割ぐらいの参加者が北海道を選んだということです。そういう意味では、特に台湾では北海道ファンがかなり定着していると思います。私が予想した以上に大きな期待が北海道にかけているということです。他の地域ではそこそこいいホテルに泊まっているのですが、北海道らしさを感じてもらうためにホテルではなく2泊をキャンプ場泊まりとしたところ、大変興味をもってもらうことができました。来年、高校生を連れて来られればと、ちょっと感触をつかんだところ。荒川 「札幌近郊花めぐりスタンプラリー」の目的は、札幌近郊の花資源のネットワーク化、フラワーツーリズムの振興、そしてフラワーツーリズムの花関連団体やマスコミへの啓発です。2003年に10施設で始まり、'04年からは月1回の日帰りのバスツアーである「札幌散歩花めぐり」を始めました。'05年には参加施設が16施設に増えて、スタンプの配布量も1万5,000冊近くになりました。さらに、花めぐりのバスツアーも月4回に増え、オフィシャルのバスツアーとは別に、幾つかの花めぐりのバスツアーが行われるようになりました。今年は17の施設が参加しています。これらの事業はいろいろな団体や企業、NPOとの連携やパートナーシップで進めていますが、これは公共施設運営のあり方の一つではないかと思っています。



荒川 克郎氏
財団法人札幌市公園緑化協会事業二課長

モエレ沼公園は、彫刻家イサム・ノグチが残した彫

刻公園で、24年の年月をかけ '05年7月に全面オープンしました。日常的な都市公園の機能と、芸術家の世界観を表現した公園の表情を持ち、来園者の45%が札幌市外からで、ゴールデンウィークには道外からのビジターが22%もありました。観光事業としては、英語版と中国版のパンフレットを用意、冬には「スノースケープモエレ」というイベントを開催しています。また、JTBと日本航空、全日空共同のバスツアーや札幌広域圏組合主催のスタンプラリー、札幌まちめぐりパスの利用実験に協力しています。



有山忠男氏
ガーデンアイランド北海道
2008を実現する会事務局長

有山 私たちは当初花博を開催したいという思いで、この運動をスタートさせました。しかし、北海道にはいろんな地域に花の魅力の要素がある。だから、1カ所でやるのではなくて、みんなが力を出し合って全道

が一つになれば、そんなにお金をかけなくても、何かすごいことができるのではないかと、「ガーデンアイランド北海道」の発想でした。今あるものをそれぞれ少しずつ磨き上げれば、すごいものになるのではないかと。例えば、美瑛とか富良野のすばらしい景観、そして十勝、オホーツクに行ってもすばらしい農村景観があり、世界遺産に登録されるような国立公園がある。それはもう数え上げればきりが無いぐらい、北海道にはいいものがある。そこが出発点でした。ただ、目標がないと動けないこともあって、'08年に一つ焦点を当て、数年かけて各地のいろんな取り組みを拾い上げ、つないで、みんなで北海道を盛り立てようというのが、「ガーデンアイランド北海道2008」です。

一つひとつの公園がそれぞれの魅力を持つということは非常に重要です。しかし、それだけでは広がりが無い。そこで一つのキーワードは、公園をネットワークしていくことかと思えます。それも公園だけではなくて、例えば農村、自然、森林なども含めて、既存のものをうまくつないで、それを利用する仕掛けを私たちはもっと考えていかなければいけないのではないかと思っています。

よく都市で「ガーデンシティ」という言葉があるのと同じように、北海道全体がすばらしい、広

い意味でのガーデンだと思っております。その中で都市公園は、都市と自然と農村をつなぐ結節点として、それを人為的にうまくつなぐことができる場面として非常に重要で、それで北海道の全てのいい資源がうまく有機的につながることを願って活動しています。

テーマ2

コミュニティの核としての都市公園

有山 今、コミュニティが崩壊し、失われているといわれています。コミュニティが強くなれば、防犯、災害に強い地域ができます。そこで、公園をうまく活用することで、コミュニティを強くすることができます。いいコミュニティのあるところにはいい公園が確かにあるのです。

荒川 公園利用の多様性とは、公序良俗に反しない広がりでの想定外の利用、筋書きのないハプニングを含むもので、これから先、公園の利用はどのようになっていくのか、本当に楽しみです。

宮武 インターネットが非常に発達していますから、施設・サービスが幾らで利用できるのか、利用者に対してきちっと情報を提供することが大切です。それから、地域の青少年の非行防止やシニアの方の健康づくり、生きがいづくりなど、いろんなサポートができるレクリエーションカウンセラーの育成の仕組みをどうやってつくるかも大きなテーマだと思います。

下平尾 公園における市民参加は、ボランティア活動の機会と場を市民に提供することによって、ボランティア自身の精神的充足感とともに、ボランティア・サービスを受けた他の利用者の満足度も向上し、この2次的効果として来園者ニーズへのきめ細かな対応が可能になるという公園管理者サイドの事情があります。これが結果的には行政サービスとして公園管理の限界を市民が補完することになり、市民参加型社会の一例として評価されることにつながると思っています。

鈴木 公園を交流のステージにして、ハワイのパークゴルフツアーを4年前にやっています。ハワイの北海道人会の方に協力的にボランティアで来ていただいて、北海道の方とハワイに住む北海道人会の方と国際交流を促進したという実績があります。観光客もうまくボランティアという視点で生かしていくと、地域とのコミュニティをつくるきっかけになると思っています。